

2. 親は自分の仕事に誇りを持って

先年、イタリアを旅行した時、靴を一足購入しました。店に入った私は、気に入った靴を見付け片足を入れてみました。靴はよく足に合っていました。それでこれをくれと言いますと、靴屋の主人は、両足に靴をはかせ、そこにしゃがみ込んで、皮の上から私の足全体を何度も何度も丁寧に撫で回しました。そして、「これはだめだ」という大きな身振りをすると、山のように積まれた箱を一つ一つ丹念に調べ始めました。私は今まで、この程度なら十分に満足していたので、「これで結構。これを貰おう」と言いますと、「それは足によく合っていない。もっとよく合うのを見つけるからちょっと待て」と言って探し続けました。

こうして時間をかけて探し出した靴をはいてみて、私は驚きました。その靴は私の足全体を實に見事に包んで、靴をはいたような感じがしないのです。歩いてみて重さを感じません。靴屋の主人の満足げな顔を見て、これが本当の靴屋というものだ、と私は思いました。

こういう靴屋は、一代限りで出来るものではないと思います。あの靴屋の主人は、自分の職業に誇りを持ち、生涯をかけて腕を磨いたこと

について自信を持っていたのだと思います。それは、親から子、子から孫へと、何代もかけて築き上げられたものだと思います。そしてこれ

コ ラ ム

豆知識

書くと**描く**

「絵に書いた餅」が「描く」を使わないのはなぜか？

【書】 手に筆を持った形を表した字で、鉛筆を持って絵を“かく”時にも、字を“かく”時にも使う。筆を持って“かく”時にはこの字を使う。本来、「字を書く」という時の一番基本的な漢字。この字は「えがく」とは読まない。

【描】 元来、きちんと田植えをすることを表した字で、田んぼのようにきれいな模様を“えがく”という意味に使われるようになり、この字を「えがく」と読むようになった。絵を“かく”意味で「絵を描く」と使われる。ですから読む時に、「かく」ではなく「えがく」と読むのが普通。

つまり、この諺は「えがく」とは読まず「かく」と読むのが慣例なので「書く」を使う。

が本当の“教育”だと思います。

わが国は、明治維新で、この精神を失ったと思います。自分の職業に誇りを持ち、堂々とそれについて子供に語る親が次第に少なくなってきたと思います。だから、今の子供たちは、親がどんな仕事をしているか、家族のため、世のためどんな努力をしているか、親について何も知らないという子が多くなっています。

親は、積極的に自分の仕事について語るべきであり、出来れば、その腕前の良いところを子供に見せてやるべきだと思います。そうすれば、親を自然と尊敬するようになるだろうし、また、親のあとを継いでその仕事をやってみようという気持ちにもなり、理想的な親子関係が出来上がるだろうと思われます。

そうなれば、親子の会話は自然と生れますので、今よく言われている“親子の断絶”ということもなくなってしまうだろう、と思われます。

子供は、背後に、頼り甲斐のある親を持っていて、初めて安心して強く生き生きと活動することが出来るのです。だから、見かけだけでは子供は甘い親を歓迎しているのですが、心の奥底では怖くても強い、厳しい親を求めているのです。

また、そういう厳しい親に鍛えられて、初めて、社会の荒波を越えていける、一人前の人間になれるのです。「かわいい子には旅をさせよ」という昔の諺も、厳しさだけが人間を鍛え、人間らしい人間を作る、ということを読んでいるのだと思います。本当に子供がかわいかったら、厳しい親、叱れる親になることに努めなければなりません。

コラム

豆知識

蟋蟀と蟀

Q 「蟋蟀」(こおろぎ)と「蟀」(きりぎりす)が、同じ字が使われているのはなぜか？

A 実は、昔「こおろぎ」と呼んでいたものを現在は「きりぎりす」と呼び、昔「きりぎりす」と呼ばれていたものが現在は、「こおろぎ」と呼ばれている。そのために(蟀)という同じ漢字が使われている。現在は、黒色をしたものを「こおろぎ」、イソップ童話『蟻と蟀』に出てくる、緑色をしたものを「きりぎりす」と認識しているが、以前は呼び名が逆だったのだ。